

研究の背景・目的

樽前山麓は、1954年に発生した洞爺丸台風をはじめ、暴風雨等により多くの風倒被害が発生していますが、一方で天然更新が旺盛な地域でもあります。胆振東部森林管理署（旧苫小牧営林署）では主として針葉樹が天然更新した林地において「除伐などの保育手段により成長量の増大を図り、健全な林分へ誘導することを目的」とした除伐試験地を1970年に設け、1971年の第1報から過去3回にわたり調査・報告してきました。今回、54年が経過した試験地の林況を過去のデータと比較・分析し、天然更新地の施業について考察したので報告します。

【試験地概要】

所在地：苫小牧市
1457ろ・1458ろ林小班
標高：860m
方位：南西
傾斜：緩傾斜
地質：火砕流堆積物



試験地全景



天然更新が旺盛な様子

除伐試験概要

調査区を4箇所設け、以下の条件のもと除伐しています。

調査区	除伐基準		
	程度	樹高階	除伐の範囲
P1	弱	1.3-2.0	30 cm以内
		2.0-3.0	50 cm以内
		3.0上	80 cm以内
P2	中	1.3-2.0	50 cm以内
		2.0-3.0	80 cm以内
		3.0上	120 cm以内
P3	強	1.3-2.0	80 cm以内
		2.0-3.0	120 cm以内
		3.0上	150 cm以内
P4	無処理		

【針葉樹】

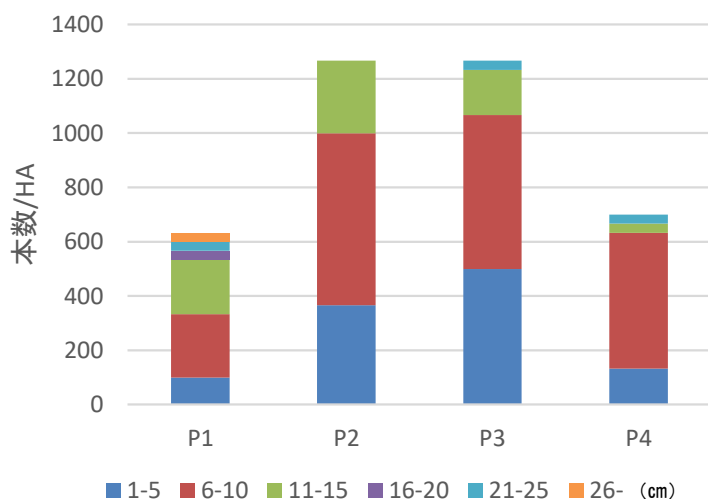
- ・ 優勢木を中心に除伐基準で示す半径円周内の競合木を除伐
- ・ 競合木でも優勢木の樹高より50 cm以下は除伐しない
- ・ 劣勢木のうち除伐基準で示す除伐の範囲外は除伐しない
- ・ 130 cm以下の稚苗・稚樹は除伐しない

【広葉樹】

- ・ 針葉樹の成長を妨げているものを選木し除伐

調査結果・今後の展望

54年後の広葉樹の径級分布の比較



分析の結果、除伐強度が大きい程広葉樹の比率が上がり、一方無施業区が最もha本数の減少率が大きく、径級及び樹高の成長が良いことから、目標林型により施業方法を選択することで将来の林分構成を変化させられることがわかりました。

風害に強い森林へと導くためには、形状比や多様度を考慮する必要があり、天然更新力を生かしつつ風害に強い林地をつくる施業方法を検討していくうえでも今回の検証結果を活かしていきたいと考えています。